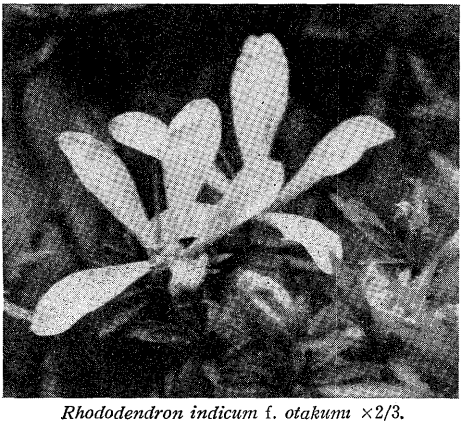
て遂一評論を加えた上で，裸子植物は一元ならんと結んでいる。(前川文夫)

○久内氏のマダラホトトギスについて（武田久吉） Hisayoshi TAKEDA: On *Tricyrtis hirta* Hook. forma *atropurpurea* Hisauchi.

本誌 **41**: 10 に発表されたホトトギスの1品は，突然変異によってて生じたものであろう。それが習志野の一角に在る二宮神社の裏山に，多数生えているらしいが，普通品と混生しているのやら，そういうものだけが生じているのやら，簡単な記事から推定するのは難い。私の庭にも左様なものがあって，古くは戦前に，沢山ある普通品のあるものが，突然そんな花をつけたが，他の種類との天然交配とも思えず，只珍らしい品種として扱っていた。それが戦事中いつとはなしに失滅してしまって，惜しい事をしたと話していたところ，戦後またも自然に現れて，今では年年その様な花をつける。花によってこの黒紫斑の程度は区々で，中には黒紫斑の間に，普通の淡紫点を交えるものもあり，柱頭は概して普通品のと大差ないのが通例のようで，その程度は一定していないようである。これで見ると，久内氏のは，極端な黒紫斑の性質が現われて居るものであろう。今年もホトトギスの季節には，沢山のこの品種について，黒紫斑の程度を観察して見ようと，楽しみにしている。

○オタクミツツジ（山崎　敬） Takasi YAMAZAKI: A new form of Rhododendron indium.

寺崎留吉氏の続日本植物園図譜 2642 図 (1938) にヤクシマサツキ，屋久島より移植栽培として，荒川一郎氏の栽培品にもとづいて画かれた図がある。将来不明の植物となってしまう恐れがあるので，わかっていることを記録しておく。現在園芸品にオタクミツツジとよんで，ごく一部の人に栽培されているものがあり，寺崎氏の図はこれと一致する。葉は暗緑色で細くて短く，花弁はこい朱赤色で，基部まで5片にさけ，開花後じきに各片ばらばらに落ちる。おしべは5本あるが発育不良で，花糸は短くてねじれており，めしべも発育不全で結実しない。サッキの一品であることは明らかであるが，いちじるしく奇形の植物である。これがどうしてオタクミツツジとかヤクシマサツキとかいわれるかというと，次のようないわれがある。荒川一郎氏は現在東京山草会会長と



Rhododendron indicum f. *otakumu* ×2/3.

して活やくしておられるが，その私信の一部を引用させていただく。“鈴木吉五郎氏が昭和6年屋久島を訪れ，島の南東にある小田汲谷をすぎた時，サツキの花変りのもの一本を発見した。その一枝を折って持帰り，中井先生にお見せしたるところ，サツキの変りものとして認めればよいので，特に命名すべきものではないとのことであった。小田汲谷のサツキゆえオタミツツジとして出した。” 鈴木吉五郎，文五郎氏経営の春及園春期園芸案内 (1937 年4月) 8頁に次のような記事がある。“オタクミツツジ (小田汲ツツジ) サツキに似た一種で同じ丈，極く細狭葉で冬期の紅葉の美しい品，花は不整ですが赤色五輪，屋久島採集の新品です，原地僅かに一本を発見して，その枝を挿して繁殖せしめたものです。” 以上のことから寺崎氏の図のものはオタクミツツジとよばれ，屋久島産のサツキの奇形品である。現在立性の本来のものと，それから枝変りでできたと思われるややしだれる性質のものが栽培されている。以上のことを調べるにあたって，お世話になった荒川一郎氏，榎本一郎氏に感謝します。　(東京大学理学部植物教室)

Rhododendron indicum (L.) Sweet f. **otakumi** Yamazaki f. nov.—*Rhododendron lateritium* (Lindr.) Planchon var., T. Terazaki, Zoku-nihon-shyokubutsuzuhu t. 2642 (1938).

Folia linearia 15–25 mm longa 2–3 mm lata atroviridia. Corolla 5-secta, laciniis oblanceolatis 25–30 mm longis 7–8 mm latis mox deciduis. Stylus staminisque steriles.

Hab. Kyushu, Yakushima, cult. in Tokyo (Fusako Yamazaki, Mai. 20, 1964).

□中尾佐助：**栽培植物と農耕の起源**　岩波新書 No. 583. pp. 192 (1966).　まことに異色の本である。まず今までの栽培起源論のような西欧中心の思想でなくまた個々の植物にばらばらにした起源説ではないことが大きく違う。過去 20 年著者が探検をした広い地域での身についた智識がその背骨になっている。その点では戦前の日本の勢力圏とが学問的に癒合して素地を形づくっているのはまことに喜ばしい。それを踏んまえた上で，思考法式として主食を主体とした農耕文化複合を浮び上がらせたことはまことに鮮やかであった。マレイシアから太平洋へのびる熱帯降雨林には発生した根栽農耕文化，西アフリカから東漸する草地利用のサバンナ農耕文化，それとサハラ砂漠をへだてて同じく乾燥地帯に出現した地中海農耕文化を識別した。そして第一の文化の地下部の利用と種子の不採用；第二の文化の雑穀及びマメという夏作物；第三の文化のムギを中心とする冬作物という顕著な特質を浮彫にした。それに附随する副次的な栽培種や習慣などにもするどい解析を加えている。それとくらべると，東亜にでてくる照葉樹林文化は主食物の点で弱く，またイネの栽培はサバンナ農耕文化の東漸の結果のように受けとれる辺はいささか難解にみえる。また新大陸農耕文化が少々軽く扱われたのは，著者が将来手をのばされるためと期待をしておきたい。英訳されたらさだめて世界的に注目をあびる事であろう。とにかく一読を要する文献としておすすめする。　(前川文夫)